
テディベアの心臓

烏籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テディベアの心臓

【Nコード】

N1289H

【作者名】

烏籠

【あらすじ】

俺のクラスに転校してきたのは幼稚園時代の友達、三國秋桜だった。久しぶりに会った秋桜は幼い頃の純粹ぶりが嘘のように毒舌小悪魔へと成長していた。反抗期か！？……っと、まあ冗談はこのくらいにしとくか。ずっとこんなノリで青春してたいのになあ……俺は血生臭いの苦手なんだっつーの。

第1話 転校生

『なおちゃん、約束だよ』

『うん、約束』

ふたりだけの大事な大事な約束。

『これでぼくたちが大人になってもずっと一緒だな！』

『忘れないでね』

俺達の大切な、約束　　。

…

「……………ん」

朝だ。

今何時だろ……………。

「……………ううん？」

長針、なな……。
短針、じゅーいち……？

「すついちずういごじゅうはついふんん！？」

遅刻だぁー！ー！！

「親父い！何で起こしてくんねーんだよっ！……っっていないよなっ」

何て薄情な親だ。

出掛ける前に起こしてけよ！

やばい、時間がない。

俺は食パンを引つつかむとすぐさま外に出た。

ちよっとボロ臭い使用感たつぷりの自転車にまたがり、爽やかな朝
の中を疾走する。

口の中がもさもさする。

いや、もそもそ？もすもす？

電話かよ。

「……って今はんな事関係ないんじゃー！ー！」

とにかく走れ！

どどん速度を増してゆく自転車を一生懸命漕いていると、ちよっ
とした青春ドラマ気分を味わえた。

そしてそのドラマの先は担任からの熱い洗礼であった。

教室中を笑いの渦に巻き込んだ俺はすごすごと席についた。

……んで、お隣りさんに一言。

「あの、誰？」

俺の知ってる限り、このお隣りさんはクラスメイトの中に該当はない。

「転校生の三國だ。ついでに西谷が案内役をするように。教科書もしばらく見せてやれよ」

「うーっす」

ついでにういっしゅ！と付け加えたら白い弾丸が俺の額に撃ち込まれた。

「ほーっお……っ」

「……あの、えーと……大丈夫？」

お隣りの三國君がやや控え目な口調で尋ねてきた。

「いやーははっ、だいじょーぶ、慣れてるから」

どんなに慣れようが痛いもんは痛い。

でも初対面の相手の前でいつまでも痛そうにしているのはカッコ悪い。一応俺にもプライドはある。その、プラスチック製の軽いやつが。

「そう、よかった」

安上がりなプライドでよかったね、と言われてるように受け取れなくもない。

にこりと笑う三國君。

こう言ったら誤解されそうだが、線の細い彼の笑顔は何と云うか可愛らしく見えた。

……って、何考えてんだ俺。

「あ！俺、西谷直幸にしたになおゆき。よろしく」

何となく気恥ずかしくなって、多少強引な流れで自己紹介をした。みた。

「三國秋桜みくにあきお。こっちこそよろしく」

『約束だよ』

あれ？

何か、今……。

「どうかした？」

よほど怪訝な顔をしていたのが、三國君が心配そうに聞いてきた。

「ん、いやー、何でもないって！気にしない気にしないー」

「おーい。西谷、無駄口たたくな」

「すんませーん！」

チヨークを持った手で構えている先生に元気よく謝った。

ちらりと隣に目を向けてみると、三國君と目があった。どきっ！なーんて。

俺はたはは……と曖昧に笑って見せると、三國君は再びにこりと笑った。

……とき？

先生にああ言われたこともあって、俺達は校内見学ツアーを決行していた。

ここ職員室ね、こつち理科室だそー、とか歩きながらの説明。立ち止まったりしないからほぼ素通り状態だ。いやだって昼休みだし、腹減ったし。

「で、ここが最後だな。終わりつと」

「ありがとう。わざわざごめんね、昼休みなのに付き合わせちゃって」

そういつて三國君は申し訳なさそうに笑った。

「別にいいって！あ、それより昼飯どうすんの？ちなみに俺は今から買っただけど」

「だったら僕も一緒にいい？一人じゃ味気ないし」

「んじゃ決まりだな」

そんなわけで、俺達は購買に向かった。

「え、じゃあ三國君って昔こっちに住んでたんだ」

「うん、幼稚園の頃までね」

教室に戻ってきた俺達は、ちょっと遅めの昼食をとっていた。そんななかで発覚したのがそれだった。

「へええ……っー事はもしかして、同じ幼稚園だったかもしれなかつたり？」

「覚えてるの？」

おお？冗談のつもりだったのに、思いのほか三國君が食いついてきたぞ。

「あれ……まさかあれか？初めてあった気がしない的な？」

ずいじおー

おお！？三國君が何やら不機嫌丸出して乳酸飲料のパックをストロ―で吸い上げてる！

俺、何かマズい事言った？

「その様子だとわかってないね……」

途端にむすつとした顔になった。

ホワイ？

「えーと……どこかでお会いしましたっけ……？」

ずじじじじじじおおおー

ぐじゃっ！

ものすごい勢いでパツクの中身を吸い上げたかと思うと、今度はおもいっきり握り潰した。ああ……怖いヨ。

「本当に、覚えてないの？」

「も、申し訳ございません……」

はあ。

ため息一つついた三國君。
そして。

「僕はちゃんと覚えてるのにねー、なおちゃん？」

なに！？いきなりあだ名を………ん？

「あれ？んん……おお？」

これは、
もしや。

「秋桜って……まさか、あき！？」

椅子を倒す勢いで立ち上がったうえで、この大声。
教室中の視線がこっち集まる。

「やっと思い出した？」

「びっくりした！だって、あのあきが……………でええーマジ？ホンモノ？」

何年ぶりだ？

幼稚園以来だから……………九年ぶりか。

「なになに？二人って知り合い？」

「うっそ、それほんと！？」

「西谷、それフツー朝の時点で気づかねえ？」

「三國君かわいいそ〜」

やいのやいのとクラスメイトが騒ぎ出した。

「うっせ！何で俺が悪者扱いなの！？」

「そんなの忘れてた直幸が悪い」

三國君……………改めあきの、つーんとそっぽを向いたままの一言。

「のおオオ！心なしか微妙に距離ができてる」

「大丈夫、僕は怒ってないよ。ニシタ二君」

「他人行儀！！」

「うわぁーん（棒読み）」

「ひっでー！西谷が転校生泣かせたぞ」（男子一同）

「どえエエエ!?!」

「サイテー!!」（女子一同）

「うがぁぁぁー!!!」

キーンコーンカーンコーン……

こうしてクラスメイト全員から罵詈雑言を浴びせられながら、俺の
昼休みは終わった。

第1話 転校生（後書き）

なんてベタな展開……。何だか普通に学園コメディーな雰囲気ですがそうはさせませんよ。……とは言ったものの、ちょっとしか書き溜めてないので正直話がどう転がるか自分でもわかりません。でもご安心を、絶対にグロ入りしますから！苦手な方、すみません……。

第2話 毒舌小悪魔

「ほんつとにごめん！」

「だからもう怒ってないってば、N谷君」

「さらに距離がつ！」

「僕は心が広いから。ちょっと忘れられたくらいなんて事ないんだよN・N君」

「今度はイニシャル！」

「それにしてもいい天気ですねピーー君」

「ついに敬語キタ！つーか何？俺の名前ってもはや放送禁止用語なの！？」「」

あれからあきはずっとこんな調子だ。
相当怒ってるようだ。

それもそうだよな、仲良かった友達に忘れられたら俺だってショックだ。
にしても……。

「いい加減機嫌直せよ……悪かったって」

この間見たドラマでも同じ事言ってたな。
確かこのあとおもいつきりフラれるんだよな……。

「いいよ、もう。別にどうでも」

フラれてはない、よな？

でも付き合ってもない俺ら。

……っておい、落ち着け俺。

……あ。

「大人になったら結婚しよう」

ぴた。

俺のこの一言にあきが足を止める。

俺は言葉を続けた。

「約束、しただろ？」

あー思い出した。

子どもの頃の約束。

できると思ってたんだ。

お互いに好きだから、そんな理由で。

でもそれは友達の域で。

ましてや俺達は男同士。

なんて言うか、俺達はまだまだ子どもだったわけ。

「覚えてて、くれたの？」

「……ん」

あらら、めっちゃ嬉しそう。

おやー？

「なおちゃん……」

昇格。

機嫌直してくれば何でもいいわい！とつい口走ったはいいが……。
しかしこの流れ、ちよつとマズくない？

「僕もずつと覚えててたよ。ずつと、ずつと……」

ヤバイヤバイヤバイ。

なんだこのピンクい雰囲気は！

まさか、まさか……？

「僕、なおちゃんの事が」

「おおおっおおおっ！？」

おいでませ、やまなしおちなしみなしわーるどオオ！？

「許せねエー……！」

ドゴオッ！

「しっわおっしっ！？」

まさかの蹴りっ。「

ずしゃああーっ！と地面を滑る俺。

「いつてー！ちょ、何すんだよ！仮にも将来を誓い合った仲なのに
い！？」

「あー、大声でしゃべらないでくれる？ねえママあれなにー？しっ、
見るんじゃないやしません！とかになるから」

「ひどっ！昔はそんな事言う子じゃなかったのに……」

「時代は常に動いてるんだよ」

「くっ……自分ばかり成長した気になって……！俺だって成長し
たぞ、身長なんかあきより頭一つ分高いんだぞっ！」

「人間としてのレベルは低いままだね、むしろ下がった？」

「どんだけ毒舌！？もういや誰か助けてーっ！」

「ねえママー、あのお兄ちゃんにしてるのー？」

「シッ、見るんじゃないやしませんっ！」

ほんとに漫画みたいな事言われたよ……。

「お茶」

「どうぞ」

「お菓子」

「はい、ただいま」

「ジュース」

「少々お待ち下さい」

「汗」

「はい………って、汗？」

いつの間にオペが始まってたんだ。

ちなみに俺は手術と上手く言えない。

だから一貫してオペと言い続ける事にしてる。

俺は絶賛パシリ中、あきの奴隷へともれなく降格してしまった。

まあ放送禁止用語よりましか……。

にしても久々に家に上がり込んできたと思ったら、この傍若無人ぶり……。

何とかありませんかね。

「次、肩揉んで」

「へーい………」

「いかがわしい本」

「イエス マイロード、…って何でやねーん！」

「あれ、無いの？つまんないなあ」

やだこの子、ほんとにつまんなそうな顔して。

「仕方ないな……僕アイス食べたいんだけど」

「いやいや、仕方ないからなぜそうなる。どんなトリック？」

「ザリザリ君がいいなあ」

「……いつてきやーす」

あき以上の仕方なさでアイスを買いに行った。

何か食べたたら後味ザリザリする……と定評のあるアイスを買うのに、俺は三軒の店をハシゴした。

何か食べたたら後味以下省略なところがなぜかクセになるらしく、そのうえこの暑さのせいがよく売れてるらしい。

迷惑な話だ。

しかしあの後味ザリザリは堪らん……。

俺も時代に踊らされたうちの一人さ。

「うーん、やっぱりこの後ザリはヤミツキだね」

「はは……そーっすね」

身も心もボロボロさ。

ほんとにこいつはいつからこんなわがまま放題になったんだ。

くそっ、おいしそうに食いやがって。
俺だってアイス食いたいのに！

「あげないよ」

にっこり笑顔つき。

なおさら意地が悪い。

「はあ……。お前ほんつと意地悪くなったな。昔は何というか、こ
う……。素直で可愛かったというか」

「何それ」

「いや、別に変な意味じゃねえよ？とにかくピュアな奴だったって
こと」

「もう中学生なんだよ、変わって当たり前だと思っけど」

「それもそうか。でも懐かしいな、あきと話すの」

「うん」

「小さい頃は時間も忘れて夢中で遊んだよな」

「それでよく叱られた」

「でもよく考えたら俺達って幼稚園の間だけしか一緒にいなかった
んだよな。でもなんつーか、十年分くらい遊んだ気がする」

「……………ん」

短い間でも俺にとってあきは大事な友達に変わりない。大人になってもずっと一緒にいよう。そう思っていた。でも、それは叶わなかった。

「直幸」

「ん？何だ」

「僕がこの町を引っ越した理由、わかる？」

あきは小学校に上がる少し前、幼稚園の時に引っ越して行った。ある事情によって。それは………

「覚えてる。おじさんとおばさんが……」

俺はその先の言葉を言うべきか、躊躇した。

あきの父親と母親は、その時期に亡くなってしまった。

いや、

殺されたんだ。

第2話 毒舌小悪魔（後書き）

やっと過去の事件がちらりとどこか登場です。

第3話 過去の事件

秋桜の両親は殺された。

まだ幼いガキだった俺は、当時あきの身に起きた事について何も知らなかった。

おじさんとおばあさんは亡くなった、そしてあきのお兄さんは行方不明になった。

親父からはその二つだけを伝えられた。

本当にそれだけだった。
あきが巻き込まれた事件について、俺がそれ以上の事を知ったのは随分後だった。

三國家に侵入した何者かによって、あきの両親は殺された。

そして、あきだけが助かった。

もしかしたら行方がわかっていない兄が生きてるかもしれないが、その可能性はほとんどゼロに近かった……。

犯人はまだ、見つかっていない。

…

「僕はその後、この街を引っ越して行った」

「それでしばらくおばあちゃんの家で暮らす事になった」

「あきはおばあちゃんっ子だったな」

「大好きなおばあちゃんと一緒にいられて、僕は毎日楽しかったよ」

「あき……」

楽しい。

でも本当は寂しい気持ちをごまかしてたんじゃないのか？

「おばあちゃんの家はここよりもっと田舎だった。きつと大人達は僕の精神面を心配して、自然の中で傷を癒そうと考えたんだよね。そこで一ヶ月間自宅待機。で、近くの学校に通い始めた」

あきは言葉の合間に、食べ終わったアイスの棒の端を噛んでいた。

「普通だったよ。僕は新しい学校で友達もできたし、成績もそこそこ。僕はみんなに両親は事故で亡くしたって話したんだ。似たようなものだし。その街の人は誰も事件の事を知らなかった。それもあって僕は普通でいられたんだろうね」

なぜ、あきはこの街に戻ってきたんだろう。

十年近く前とは言っても、事件の事が完全に忘れ去られた訳じゃない。

あきは被害者だ。

それでも噂の種に充分なりうる。

そうだったタチの悪い噂は、話し手の意思に関係なく人を傷つけてしまうものだ。

それがどんどん広がる。
酷い話だ。

「直幸が言いたい事当ててあげるよ。何でわざわざこの街に帰ってきたんだ？……だろ」

「……ああ」

「僕は誰に何と言われようが気にしないよ。だから帰ってくる事自体に抵抗はなかった。気まぐれだよ。ちょっとそこまでの感覚で充分なんだ。まずはどこに行ってみよう……そうだ、直幸に会いに行こう。……うん、こんな心境」

「……お前大胆だな。そんな気軽に普通ここまで来るか？」

「変かな？まあ、それはいいとして。だったら本格的に里帰りするのもいいかも。てかもう当分そっちで生活してみる方向もありか……と」

「すげーなおい」

「おばあちゃんは僕に弱いからかくかくしかじか、まるまるつまつまって感じで温かく見送ってくれたよ」

「まる……つまっ」

「“おめえがそうしてえんなら好きにこなせえ、ばあちゃんはずっとあきちゃんの味っ方だあ”って……」

「え、本当にそう言ったの？ーかそんなしゃべり方だったの？」

「ありがとう、おばあちゃん……っ！」

どこか明後日の方向を見ながら、秋桜は己の道突き進む決意を固めたのであった。

何、これ。

「まあそういっわけだから、これからもよろしく」

「お、おう」

「雑用係」

「まだ怒ってんのかよ!?!」

「三國くん、おはよ!」

「おはよう」

「はよっ、転校生。お、後ろのは家来か」

「うん、僕に忠実な下僕なんだ」

「ぶっ!ダッセー」

「やだウケる〜」

「お前らは鬼かア！」

クラスに馴染めてよかったね、とかそんな微笑ましいもんじゃないぞ。

何だこれ、クラス中がグルか！

俺どんだけいじられキャラなんだ。

「くそっ、みんな騙されるな、こいつ腹ん中真っ黒だぞ！」

俺の事明らかに下僕呼ばわりしてるのに、このクラスの奴らの（悪）ノリのよさは異常だ。

「昔のダチの事忘れるひとでなしが悪イよ」

「そうよ、外道！」

「ちよ、それはいかに何でも傷つくから！あと人の道は踏み外してませんっ」

「あはははっ」

「あーきー！」

本当に最悪だー！

……でも。

ほんと、クラスに馴染めてよかったな。

あきの、新しい居場所だ。

「このアンポンタン！」

「すつとどつこい！」

「ヘタレー！」

「ロリコン野郎！」

……っつて、お前ら。

「言い過ぎじゃー！」

や……やっと終わった。
ガクッ。

「どつしたの、な・お・ちゃん」

「いや、アンタのせいだよ」

俺は確かにこのクラスでは普段からいじられキャラというポジションだったが、今日は一段と酷かったような気がする。それもこれもあきのせいだ。

小悪魔で腹黒で、その上ドSかよ。

「さ、帰ろ？」

「はいはい」

それなのにこの笑顔。

反則だろ。

いや、何がって。

それはその、ねえ？

何だか昨日からやたら変なフラグが目につくような……。
いや、気にしない気にしない。

落ち着け、俺。

いくら何でも考えすぎだ。

はっ！さてはあれか？

今までのフラグの数々はあきなりのスキンシップ？

ベーコンレタスとかじゃなくて男の熱い友情か！

そうだったのか……。

すまないあき、気づいてやれなくて。

そうだよな、本当に久しぶりの再会だったもんな。

過剰にじゃれつきたくもなるわな……。

よし、今日も家に誘おう。

「あき、今日も家来れば？」

「もう着いたけど」

「おお？」

気がつくともうすでに家の目の前だった。

「さっきからぼーっとしてたけど、何考えてたの」

「いや、別にー」

お前の事考えてたとか言えない。
怪訝な顔のあきを玄関まで急かした。
そしてドアを開けて、

「「ただいまー」」

俺達の声がキレーに重なる。

……んんー？

第4話 お世話になります。

「いやいや。何故あきもただいま？」

「えー？だって、」

「おーっ！お帰りお二人さん」

無駄にバカでかい声に介入された。

「親父！」

「おじさん、お久しぶりです」

「いや〜懐かしいな秋桜君！すっかり大きくなっちゃって」

「ありがとうございます。これからお世話になります」

「いやいや、こちらこそ。これで家も賑やかになるな〜」

俺は一人蚊帳の外で二人のやり取りを見ていた。

「荷物は部屋に運んどいたよ」

「わざわざすみません」

「遠慮はいらないよ、もう秋桜君は立派な家族なんだから」

「おじさん……っ、ありがとうございますー！」

「待て待て待てー！」

「ん？何だ直幸」

「どうしたの？」

「どうしたもこうしたもねえーよ。何か聞き捨てならない事を話してたような……」

いや、やめてキョトンとするの。

俺のほうがしたいわ。

「秋桜君、もしかしてまだ話してないのか？」

「あ、いつけなーい」

「このうっかり屋さん」

親父イイ！

やめろ！ 付けんなよ！歳考えろ！

何なんだこの茶番は。

「ごめんごめん、言い忘れてて。僕、今日からここでお世話になる事になったから」

……は？

「あの、お世話とはなんぞや？」

「だから、直幸の家に住むんだって」

「え……………あき、が？」

「うん」

「いや、家が賑やかに」

「ってなんでやねーんツ！少しは会話を繋げろよ！」

「何言ってるの、話繋がってるやんか」

「違いーよ！口調じゃなくて会話の流れだから！」

「やだな直幸、ノリ悪うー」

「そんな子に育てた覚えないぞ」

あんたらのそのふざけた態度が悪イんだろうが！

俺はついに家庭でも居場所をなくしてしまったのか。

「……………で、マジにあきは家に住むのか？」

「さっきからそう言ってるじゃん」

何このマイペース。

「はあ……いつからそんな話になってたんだよ」

「昨日だよ」

急だな、おい。

「昨日はとりあえずフミちゃんここに泊まってたんだ」

フミちゃんとは近所に住んでるおばあさんだ。

文緒さんというのだが、さん付けだと怒るのでそう呼んでいる。

「それでフミちゃんから俺に秋桜君の事を電話で聞いてだな」

「……二つ返事で受けたんだろ」

「おっ」

ははは……返事も決断も男らしいですね。

まあ昔から馴染みのあるフミちゃんの頼みという事も理由の一つだろう。

「と言うわけでよろしくね」

お前それでよろしく何回目だよ。

それすら言う気力も削がれていた。

そしてどんだけ王道パターン？

こつこつって普通女の子が相手だろ？

「悪かったね男で」

「心の中まで読まないでクダサイ……」

カムバック、俺の平穩。

「助けてなおちゃん！」

ぱんっ！と派手に音を立てて部屋に侵入してくるあき。

「どしたよ」

「荷物の片付けめんどいからやりたくない、手伝って！」

「ふっ、その手には乗らねーぞ。何だかんだで全部押し付ける魂胆だろ」

「え。駄目なの？」

「片付けぐらい自分でなさい！」

「やーだー！お母さん手伝ってよあー」

「俺はいつからお前の母親になったんだよ」

「ちっ………役立たずが」

「少しはキャラを一定に保つ努力しろよ……」

そのままずると引きずられるようにして隣の部屋まで移動させられた。

もともとは物置として物が乱雑に仕舞われていたが、いつの間にか綺麗さっぱりと片付けられていた。

親父が張り切って片付けに勤しんでいる姿がありありと想像できた。そして正体不明の段ボールが三つ、俺の部屋の片隅にどっかりと置かれていた。

それ片付けじゃないからね、邪魔な物をほったらかしただけだから。

「しかし一日足らずでよくここまで綺麗にできたよな。物置からこざっぱりした空き部屋に進化するとは……」

「空き部屋……あき、部屋」

「違うぞ、決してサブイオヤジギャグじゃないぞ」

何やら楽しそうに笑うあき。

こいつの笑いのツボは俺には理解できん……。

俺はため息をつきながら、親父がお遊びで作ったであろう段ボールピラミッド（三段）の解体を始めた。

「つく、あははっ」

「あきおくん？今はお片付けの時間ですよー」

掃除や片付け中恒例の漫画の誘惑に逆らいきれなかった（むしろ逆らう気がさらさらない）あきにやんわりと注意する。

「直幸、口じゃなくって手を動かさない!」

「悪い悪い……っつて、ええー?」ほらみる、自分で片付ける気ないじゃねーかよ。

「へいへい、やりやいいんだろ」

それに素直に従う俺って……。

俺この先ずつとあきにコキ使われまくるな、絶対。

「……………ん?」

片付けも終盤に差し掛かったころ、最後のひとつとなった段ボールの中のある物に目が留まった。

これは、

「くまのぬいぐるみ……?」

年期の入った、ふさふさした茶色の毛をしたくまのぬいぐるみ。

その段ボールの中には他にも6体、大小様々なくまのぬいぐるみが入っていた。

「何だこのメルヘンの塊は……」

「実は僕、ぬいぐるみがないと安眠出来なくて……ぐすっ」

「いやいや……ええー？」

「こづ……ぎゅっと、して。ぐがぁー、と」

「リアクションに困るわ」

にしても案外可愛いとこあんだな。

完全なDSへと生まれ変わったわけではないようだ。

そしていそいそとぬいぐるみをベッドに並べだした。
うん、自分のやりたいところだけ行動力発揮するよな。

そうこうしている間にメルヘンチックなベッドが完成した。

「これ、ずいぶん古そうだな」

「小さい頃からずっと持ってるしね」

「言っちゃ悪いが、捨てようとか思わないのか？」

「それがね、捨てれないんだよ。前に捨てようとした事があったんだけど、何故か戻って来ちゃってさ」

「戻ってきた？」

「朝起きたら枕元にあるんだよ。何回捨てても必ず戻ってくるから困った困ったー。あははっ」

「……え、それって」

崇りか？

崇りなのか！？

それはいわゆるいわくつきのアレか！

「おまつ……ヤベーよ、それ呪われてるよ！？」

「えー何それ、直幸っておばけ信じてるの？」

「信じてなかったけど今信じた！」

「大袈裟だなあ、たかだか捨てたぬいぐるみが枕元に帰ってきたぐらいで。確かに知らない女の子がずっと後ろをついてきたり天井から女の人が逆さ吊りになったり僕の部屋だけ地震が起こったりするけどさー」

「ああああアーーー！！！」

第4話 お世話になります。(後書き)

更新滞ってすみません……。

第5話 過去を知る男

「おはようございませーす」

「おー起きたか。朝飯できてんぞー」

「はーいー」

「直幸もさっさと座れよー……って、なんだ？どうかしたのか」

「はは……別に何でもねーよ」

嘘だ。

おもいつきり何かあったよ。言葉じゃ伝えきれないほど恐ろしい目に。

「どしたの、朝からそんな亡霊みたいな顔して。変な直幸」

お前のせいじゃー！

亡霊みたいなじゃなくてリアル亡霊に襲われたんだよ！

………夢だけど。

「あき……俺やっぱユーレイ駄目みたいだ」

「何、ユーレイが出たのか！？なんてこった！悪霊たいさアアアん

「!!」

親父が明らかに効果ゼロの呪文(?)を唱えた。

「夢だよ、現実に出たら俺泣くわ!」

「あつねー、僕のせい?」

「他に誰がいるんだよおお!!」

俺が!

あの話聞いて!

どれほど!

恐ろしい目に!

あつた事かつ!!

「下手な字数稼ぎはやめなよ、気持ちはわかるけど」

「人の心を覗くなあ!」

ごろり。

一人寂しく机とスキンシップする俺。

押し当てた耳がひんやりとした。

……眠い。

「あー楽しかった」

晴れ晴れとした笑顔でお隣りさんが帰ってきた。
俺の笑い話を無事話し終えた模様。

「でも今日はいつもより物足りなかったなー。直幸が夢の内容言ってくんないせいで」

「笑い話のネタにされるのがわかって誰が話すか。俺にとっては恐怖体験なんだぞ」

「じゃあ今から怪談話してくるから教えて」

「いや、無理だから」

そこで都合よくチャイムが鳴ったが、あきが小さく舌打ちしたのを俺は見逃さなかった。

慌ただしく教室内を移動するクラスメイト達。
だが全員が席に着く前に、いつもは2、3分遅れて来るはずの先生が教室に入ってきてしまった。

「先生がいつも遅れると思ってたやつは負けだぞー、さっさと席に着けよ。……よし、全員座ったな。西谷は……おお、ちゃんと起きてるな」

「先生、俺がいつも寝てると思ったら負け……いでっ」

先生の必殺技・白い弾丸が炸裂した。

お守りを忍ばせていたおかげで助かったぜ……みたいな奇跡を俺の額で実現する事は出来なかった。

「今日もウチのクラスに転校生が来たから、皆仲良くするよーに」
なんて斬新な転校生紹介だ。
入って来ていいぞー、と先生が話しかけると教室のドアががらりと音をたてて開いた。

「え、うそ」

と、お隣りさん。

まさか今になって先生にツッコミ？

……ではないようだ。

なぜならあきの視線は新・転校生にしっかり向いているから。

「篠枝左依しのえだまへです。よろしく」

女子が黄色い騒ぎを起こすなか、俺は何やらただならぬ雰囲気をもとったあきを気にしていた。

どうしたんだろうか。

その時、あきと転校生の目が合った。

ばっちり。

そして転校生は一言、

「久しぶりハニー、元気にしてたー？」

とのたまった。

教室中に声の嵐が吹き荒れた。

「西谷。いいのか、あれ」

「何だよあれって。若いうちからあれとかそればっか言うなよクラスメイトA」

「琴原だ！だからさ、新旧転校生コンビほったらかしでいいのかよ」

「知らねーよ。何か知り合いみたいだし？かなり親しい仲みたいだし？だからって俺はなんも関係ねーし？」

「西谷……お前のオーラだけでキノコ栽培できるぞ」

朝から仲良くしっぱなしの机に突っ伏す。

そしてのっそりと顔を上げて、何やら話している新旧転校生コンビに視線を遣った。

ここからじゃ何を話してるのかさっぱりわからない。

「拗ねんなよ」

「べつつに、拗ねてなんかないぞ」

琴原はにやにや笑いながら本当かー？なんて聞いてきた。

俺は徹底無視の姿勢をとった。

目の端で琴原がわざとらしく肩を竦めるのが見えた。

別に俺は二人の仲が気になったとか詮索しようなんて気持ちはない。情報収集に余念がない女子諸君から頼まれたからであって、決して俺自身の個人的な感情は一切存在しないわけで……。

「あき、入るぞ」

「んー」

机に向かっている後ろ姿からてつきり勉強中なのかと思っていたが、実際は某少年誌を読んでいるだけだった。

俺の部屋から消えた漫画を読んでいる事や膝の上のぬいぐるみは一切スルーして、俺は今一番聞きたい事をあきにぶつけてみることにした。

「転校生の篠枝って、あきの知り合いなのか？」

「うーん、まあね」

うーんて何だ。

微妙な仲ってことか？

「中学ん時に同じクラスだったんだよ」

「ふーん……」

その学校ではクラスメイトをハニーと呼ぶ習慣でもあるのか。

……言えねー。

「朝のあれは気にしないで、左依が勝手に言ってるだけだから。あ

いつもの挨拶みたいなもんだから」

下のお名前で呼ぶ仲ですか。
結構結構。

「……………拗ねてる?」

「ぜんっぜん」

思えばあきと俺が一緒だったのは幼稚園の頃だけで、引越して行ってから今までのあきを俺は知らない。

俺が知らない間にあきがどんな人間と出会ったとか友達だったとか知るはずもなく。

俺の記憶は子どもの頃で止まっただけ。

俺が知らない時間を生きるあきを、篠枝は知ってる。

「直幸……………?」

「……………あ、そっか、わかった。いや、これで女子にイヤミ言われなくて済むよ。助かった助かった」

「なお、」

「んじゃ、俺戻るわ」

何か言いたげなあきを遮って、俺は部屋に戻った。

第5話 過去を知る男（後書き）

遅くなってしまうすみません、申し訳ない気持ちでいっぱいです…
…。ずっとこんなペースが続くと思いますが、気長に待つて頂けたら嬉しいです。

第6話 青春と夕陽とA（前書き）

BL風味。

第6話 青春と夕陽とA

「二人ともおっはー！いや〜今日もいい天気どすな」

「お、おっはー……」

「おいおい直幸、秋桜くんが若干引いてるぞ」

昨日の事で気まずくならないようにと思ったのに逆効果だったか？でもぎくしゃくするのは嫌だし、俺は出来る限り普通に振る舞おうとしていた。

……はずなのに。

「や、姫。おはよ」

「左依キモいよ」

「あっはは、恥ずかしがり屋さんめ」

「あの、通れねーんすけど」

おのれ新キャラ。

俺がせっかく頑張っているというのに。
ドアで待ち伏せとはいいい度胸だ。

「ごめんごめん。さ、どーぞ」

「いやいや、悪いね」

「あきおちゃんはこの胸とーまれ……って、ちょっ！反対側のドアから入んな」

「ちゃっかりもう一つの扉から教室に入って行ったあきは何事もなかったかのように席に着いた。」

「あーあ、逃げられちゃった」

「残念だったな篠枝くん」

「ひゃひゃひゃっさーみろとか口には出さずに思ってみる。」

「ちらり、とこっちを見る篠枝。」

「にやついてるのばれたか……？」

「居心地悪いし俺もさっさと席に着い」。

「えー、と。あれだ、西谷くん」

「わーお。引き止められたよ。」

「西谷でいいよ」

「じゃあボクのごときは篠枝で」

「いやもうとっくに、心の中ではもう呼び捨てだったけど。」

「ね、あきおちゃんどどーいう関係？」

「同じ幼稚園に通ってたんだよ」

「正解！」

なぜアンタがそれを言う。

「あきおちゃんに聞いた通りだね。ちなみにボクは中学が一緒」

「正解。俺もあきに聞いた通りだよ」

「あっはは、西谷って面白い」

「篠枝もなかなか面白いよ」

なんか珍獣的な意味で。

「よし、続きは休み時間でやれよー」

お約束の先生登場。

ちっ、命拾いしたとか言うのは負けフラグっぽいので止めた。

あれから休み時間のたびに俺達は腹の探り合いじみた会話を繰り広げてきた。

気ががつけば昼になり、放課後になり、そして今もそれは続いてい

た。

「って、何で一緒に帰る羽目になってんだ！」

ついそのままのノリで教室を出たら、いつの間にやら三人一緒に下校する事になっていた。

「二人の家ってどんなところかなー」

「うわーこの人めちゃくちゃ上がる気満々なんですけど」
勘弁してくれ。

そんな俺の気持ちを無視して篠枝は家にお邪魔してきた。
人数分の麦茶をお盆に乗せて、俺はあきの部屋まで運んだ。

「おまたせー……………」

ドアを開けた瞬間、俺は石みたいに固まってしまった。
ぬいぐるみだらけのメルヘンベッドに乗り上げた篠枝と、その下に
いるあきと目が合う。
ほわーい？

「……………アノ、オ二人ハ一体何ヲシテラツシャルノ？」

片言の日本語で精一杯だ。

「……………プロレスごっこ？」（下）

「そうそれプロレス」（上）

もつとまじな言い訳はなかったのか。
あきは完全に目が泳いでいる。

「あー……俺、ちょっと出てくるな」

邪魔者はさつさと消えますよ。

あきが何か言いかけてた気がする。

けど、残念ながら耳を傾ける余裕はない。

俺はせめてもの嫌がらせのつもりでお茶を持って部屋を出た。

……ちつと。

「そりゃ確かにさ、俺とあきが一緒にいたのは幼稚園の頃だけだったよ。でも考えてみたら中学も幼稚園も時間的にはあんま変わんなくね?とか思うんだよ」

「……そーですね」

「そもそも一緒にいた時間とかそういう事じゃないだろ。重要なのはどんだけ友情度を育んだという事であってだな」

「俺もう疲れたんだけど……」

「いやいや、だからってあんなぶっ飛んだ友情の育み方は違うだろ。もはや別の何かを育もうとしてるだろうがーっ!」

「だあーもう! 帰れよ頼むから」。人の家押しかけておいてグチグ

チグチグチさあ、もうたくさんなんですけど!」

キレルクラスメイトA。

そう、ここはクラスメイトAの家なのだ。

「琴原だ、K O・T O・H A・R A I!」

「ちょっと依月^{いづい}くん、うるさい!」

ドア越しに聞こえてきた声は多分琴原のお姉さんのものだ。

「ごめん姉ちゃん!ほら、姉ちゃん怒ると怖いから今日のところは
お引き取り下さいマジで」

「えー」

俺の不満の声は無視され、ぐいぐいと琴原に押されながら家の外ま
で連れて行かれた。

「Aの薄情者!」

「せめてKと呼べ。お前なあ、こんなところわざわざ来る前に三國と
話しろよ」

そんな言葉付きで送り出された。

大きなお世話じゃーとか思いながら俺は家路に着いた。

俺、何でこんなに必死なんだろ。

篠枝があきと中学一緒だったとか、十年の空白とか、数日間また一

緒にいられた事とか、でも今はなんか遠いとか。

あーもう何がしたいんだ俺！

考えてみたらおかしいだろ。

もやもやした気持ちとか、あれが嫌だとか、これがきにくわないとか。

そーいうのは全部、あき関係のことで、一日中そればっか考えてて。俺の頭はいつお休みできるんですかーっ、なんて感じで。

なんか埋め尽くされてんだよ、ゼーんぶ誰かさんのことで！これじゃあまるで、

「春が来たみたいやないかーい！」

夕日に向かって叫んでみた。

「頼むから俺の目の届かないとこでやれやこの色恋男ーっ！」

俺の背後からAの悲痛な叫びが響いた。

第7話 お泊り

「はあ……」

重い足取りで家に着いて時間を確認すると7時過ぎ。

携帯を意味のなく開け閉めしながら家の前をうろつくと不審者のまね事をしつつ、ふと気がつくと時刻は7時15分。ぎゃー。

さすがにこれ以上うろつくと本当に不審者に成り下がってしまいそう。

仕方ない、観念して入るか……。

こんな時間だから篠枝はもうとっくに帰ってるだろうし。

ガチャ。

「お帰り〜！もうこの不良少年め、遅いぞ！」

バタンツ！

……………なんだあれ。

俺、今なんか……その、不気味な幻覚見ちゃったような？見てしまったような？

今の完全にアイツだったよなそうだよな。

だって……………ええー。

「何やってんの直幸」

プチパニックを起こして頭を抱える俺を、ひよっこりとドアの隙間から顔を出してあきが覗いていた。

「何ってアレだよアレ。変なのがいなかったか？篠枝っぽい人物がエプロ的なもん着て俺に話しかけてくるなんて事態が起こったみたいなのが。どうしよう、俺の目やばいかも……」

「幻覚じゃないよ、だから安心して直幸」

「ご本人登場ばーんっ！」

「うわぁ出たよ……」

マジで涙出そう。

鉢合わせしないようにAの家で時間潰してきたのに、こいつ！
てつきりもう帰ったものと決めつけていただけにショックが大きい。
余計にパニックっちまったじゃないか。

「まあ立ち話もなんだから入りなよ西谷」

ここはお前の家じゃねーよ。
ツッコミたい事は山ほどあったが、とりあえずなかに入ることにした。

部屋中に漂うカレーの匂いに釣られたわけじゃない、断じて。
ただちよっとお腹にカレー一皿分の空白があるだけだ。

「いただきますーす」

ぱくぱくとカレーを口に運んでは食べるあき。
食べ盛りですねーで片付いたらどんなにいいことか。
俺は斜め前に座っている篠枝を睨んだ。

「ほらほら西谷くんもお食べ〜」

全く効いてない。こいつ、やりおるな。

だいたいなんであきの隣にちゃっかり座ってんだよ。

そもそも人の家で勝手にクッキングに勤しむってどういうことだらーッ。

つーか親父どこ行った!?

「今日おじさん帰り遅くなるみたい。懐かしい友達とばったり会っちゃったみたいで、ちょっくらツチノコ探してくるって」

「どんな友達と会っちゃったの!？」

あの親父イ……いや、いたらいたでややこしくなるからまあいいや。
俺の親父は変わり者で、その親父の友達ということはやっぱり変わり者なのだ。

類は本当に友を呼ぶんだぜ。

とにかく、未確認生物やらUFOやらといった類の話を聞きつけてはよっしゃー!と勇んで出掛けて行く。

そんな理由で家を空ける事はしょっちゅうだった。
別にいいんだけどね、夢があつてさ。

つて、それは今置いとくとして。

問題は篠枝だ。

一体何を企んでいるのか……。

……はッ！

「し、篠枝。お前、まさかとは思うが……ひよっとして泊まる気じゃないよな」

「あらバレた」

「何ですと!?!」

そんな気はしてたけどね！

「あっははは、大丈夫大丈夫。ちゃんと着替え持って来てるから」

怖ッ！

それって今日の朝からずっと持ってたわけだろ？

確実に泊まる気でいたに違いない。

俺の家を乗っ取る気か。そうなのか？

まさかこのまま家に居着くつもりじゃないよな。

今までの展開からして十分有り得る……。

恐る恐る篠枝の顔を見ると、奴はにっこりと笑顔で邪悪な一言を言い放った。

「あ、心配しないで。週一のペースだから」

「週一!?!」

「着替えだけじゃなくて歯ブラシもあるから安心して泊まれちゃう」

何が泊まれちゃうだ何が！

これはきつとあの作戦に違いない。

少しずつ私物を置いていき、徐々に乗っ取っていくパターンか！

「というわけで部屋に泊めてくれない？あきおちゃん」

ぶちっ。

何かが切れた。

俺に新たな使命が出来た。

篠枝という男の監視だ。

これ以上好き勝手されてたまるか。

「西谷……まさかボクのこと、好きなの？」

「んなわけあるかい」

「だってずーっと見てくるし、もしかしてボクに気があれのかなって。きゃー」

「絶対ないから安心しろ」

「あっははー。ほんと西谷っておもしろいね」

……疲れた。

さっきからずっとこんな調子だ。

篠枝のペースに巻き込まれっぱなしで、正直もう逃げ出したい。でも残念な事にここは俺の部屋。

「ねーあれやろ、枕投げ」

「断る」

言葉と態度のセットで拒否を示しているというのに、篠枝は俺目掛けて枕を投げつけてきた。人の枕勝手に投げるなよ……。

「ノリ悪いぞ西谷。なら今度はあれね、好きな子を大・発・表！」

「なにこの無駄にウザい修学旅行のノリ」

「ボクはもちろんあきおちゃん」

ああ、やっぱりですか。

「西谷も好きでしょ、あきおちゃんが」

……本当に何なんだこいつは。

「あーはいはい好きですー。というわけでオヤスミ」

「待て待て、夜はまだ長い。とことん話し尽くそうじゃないか」

「お前うざいって言われたことない？」

「全くをもってない」

「そうか。んじゃ俺はもう寝るから話しかけんなよ」

「させないぞー寝かさないぞー」

もうほんつと勘弁してくれ。

監視しやすい＋あきに近づけたくない。

そんな考えから篠枝を俺の部屋に無理矢理引っ張ってきたけど、甘かった。

俺の体力と気力がもたない。

お願いだから早く夢の世界旅立ってくれ。

「ヒツジがいつぴきいーヒツジがにひきいーヒツジがさんびきいー」

「おお、西谷ってそれで寝れる人？ボク初めて見た」

お前だよ。さっさと眠れー！

「よいしょつと。お邪魔しまーす」

「ぎやあああ〜！」

唐突に。

本当に何の脈絡もなく。

篠枝が俺の布団に潜り込んできた。

第8話 篠枝×俺Ⅱ 801 - (前書き)

微B L。

第8話 篠枝×俺 801 -

「ちよつ、何してんのお前!?!」

「どーぞお構いなく。ちよつと体借りるだけだから」

「構うわ!そんなアヤシイ発言されて黙ってられるかつ」

「酷いな。ボクって抱きまくらのなものがないと眠れないのに」

どっかの誰かさんと同じ理由かよ。
部屋別々にしといてよかった。

「俺は抱きまくらでもぬいぐるみでもないから諦める。無理なら布団丸めて抱き着け」

「ケチだな西谷、おりゃ」

「のああ、ああっ!」

篠枝は俺の体の上にぴったりと密着（つまり抱き着いてきやがった）し、猫のように顔を擦り寄せてきた。
顎が篠枝の頭でぐりぐりと圧迫される。

「やめんかい、このセクハラ野郎っ!」

俺は負けじと渾身の力を込めて篠枝の額をぐいっと押し退けた。

「痛たたたつ。でーぶい反対っ!」

「お前の存在の方がよっぽどバイオレンスだ!」

男二人、一つの布団の中で何してんだか。

勘弁してくれ(二回目)。

昨日は幽霊騒ぎ(夢)のせいでちょっとしか寝てないんだよ。

「あー暑い……」

「もう夏だからね、暑いあつい」

「そう思うんなら退けよ」

「いやんっ」

ああ、おもいつきり殴りたい。

いやいや、冷静になれ。

こうなりやとことん無視だ。

こういうヤツは相手にすればするだけつけ上がるもんだから、反応して言い返したりする方が負けだ。

放置するに限る。

ごろりと横向きになって目を閉じた。

「あれ、寝ちゃった?」

寝てます。

そりゃもうぐつぐつすりど。

例え屋根が吹き飛ばうがお隣りの騒音おばちゃん騒ぐうが、起きないくらい深い眠りについているのだ。すーやすや。

篠枝はなおもしつこく俺に声をかけたり突いたりつねったり揺すったりしてきたが、俺は今にも爆発しそうな怒りをぐつと堪えて寝たふりに徹した。

しーん…。

ふいに静かになった。

俺は一瞬、篠枝がいなくなったんじゃないかと思った。

でも俺に覆いかぶさる人の気配はそのまま、まさかこんな状態で寝たとか言わないよな、と心配になった。

ごそ、

暑苦しい布団もどきが動いた。

多分、顔を寄せてきてるんじゃないだろうか。
耳元に息遣いを感じた。

「あきおちゃんの秘密、教えてあげようか？」

ぱちっ。

思わず目を開いてしまった。

やべっ、とか思ったけど後の祭り。

観念して横向きの姿勢から仰向けに、ごろり。

「おっは、西谷」

にーごり。

もしくはにんまりと。

篠枝が嫌な笑みで俺を見下ろす。

うええ……… 実に不快な体制だ。
まさかここにきて生粋の男好きです なんて言わないよな。
……… 言わないよね？

「……… 篠枝って俺のこと好き、……… とかないよな。いや、ないって
言ってる」

じーっ、と。俺を見下ろす篠枝。
ノーリアクション？一番怖いわ。

「うひゃっ！？」

ちよつと待て！説明？後じゃだめ？
余裕ねーよ！

「あっはは、くすぐりたい？」

「何すんだお前はっ！」

「なにつて、お触り？」

全く悪びれる様子もなく篠枝は言う。

何を思ったのか、この男は俺の左胸を何の前触れもなく（コイツの
行動はいつも唐突だが）触れた。

そして撫でやがった。

ほ、本物の男好き？

「はっ、ははは早まるな止める！こーいうのはよくないよ篠枝クン
！？ゴインなのはあまり感心できんなまったく。それにほらよく
見る、俺月並みだよ、むしろ下の下だから残念ながら！俺なんか襲

つてもお得感ゼロだと思っけどな!?!」しどろもどろのもみくちやくちやだよもう!!」

助けて神様、アツーー!

「えく?ボク、西谷のこと襲うなんて言ってないよ」

……………へ?

「だってボクはあきおちゃん一筋だもーん」

「だもーんって……………ええー?」

「襲われたかったの?」

ぶんぶんぶんツ!(秒速10往復する俺の首)

「よかったね、ボクに好きな人がいて。でなきや今ごろ頂いてたよ」

この夏一番の恐怖体験だ。

「あー楽しかった」

「俺は死ぬかと思ったよ……………」

人間、恐怖で死ねるんだ。

そう言っても過言ではない気がした。

「あつ、そーだ。あきおちゃんの秘密のことだったよね」

そんなこと言ってたな、そういえば。

さっきので全部ぶっ飛んでだけど。

「ボクが言いたかったのは、これ」

篠枝が僕の左胸を指差す。

そして悪戯っぽい笑みを浮かべて、こう言った。

「あきおちゃんは心臓のコレクター収集家なんだよ」

……収集家、って。
どういっつっちゃ。

「知りたい？」

もちろん、

「当たり前だろ」

そしてまたにつこり（にやり）と、篠枝は笑った。
何がそんなに可笑しいんだか。

「じゃあ、話してあげる。よく聞いて」

この体勢のままかい。
そうツッコミたいのをぐっと堪え、俺を見下ろし続ける俺の話に耳を傾けることにした。

第8話 篠枝×俺 801 - (後書き)

危うく直幸を受けさすところだった……。だらだらとすみません。

第9話 ハート泥棒に恋をして！

「中一の時、ボクとあきおちゃんは同じクラスだったんだ。でも最初はただのクラスメイトって感じで、たいした印象はなかったんだよね」

可愛かったから一応チェックはしてたけど。

「でね、学校の周りに野良猫がやたらうろついてさ」

「待て待て、話変わってるぞ」

すかさず西谷のツツコミ。なんて芸人肌。

「まあ、聞いてなさいって。その猫ちゃん達のなかにボクのお気に入りの子がいたんだ。それがもうきゃわゆいのきゃわえーの」

ほう、とため息をつく。恍惚。

邪魔して悪い、話を進めてくれ。と、お疲れ気味の西谷。

「で。猫ちゃん達には憩いの場があってね、それが旧校舎。まあ、不良の溜まり場でもあったんだけど滅多鉢合わせしないし。とにかく猫好きのボクはよくお邪魔しに行ってたのだよ」

あの旧校舎って立入禁止のくせに管理が甘いだよね。

ボロいからちよつとした隙間がそこかしこにあるし、鍵なんてあつてもないようなもんだし。

つまり誰でも出入り自由なわけ。

そりゃもう猫だろうが札付きのワルだろうがご利用可能。

ボクは平和主義だから、不良の先輩方がいらっしやらない時間帯を狙って旧校舎内に侵入していた。

「ところがところが。猫ちゃん目当てでそこに来るのはボクだけじゃなかったんだよね」

もうお分かりかい？

「あき？」

「正解！」

給食のパンをちぎって猫に与える姿を、ボクはこっそりと物影に隠れて見ていた。

「なぜ隠れる」

「だってその方が面白そうだし」

猫に囲まれた美少年って絵になるだろ？

なにより萌え、……ごほん。

とにもかくにも、ボクはその微笑ましい光景をしばらく眺めていた。

……あつ。

「猫ちゃんの群れのなかに、ボクのお気に入りを見つけたんだ」

にゃーにゃーと擦り寄るその猫にあきおちゃんはパンをちぎり与える。

パンはあっという間に消費された。

それがわかると猫達はその場を離れて行った。

「でもリズちゃんはそこを動こうとしなかった」

「いや、誰」

「お気に入りの猫ちゃんの名前」

リズは餌を与え終わってもしばらくはそこに留まる。

一番人懐っこい子だ。

あきおちゃんが頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めて、それを見たあきおちゃんはやわらかく笑った。

「猫と美少年の観察がボクの日課になったよ」

「お前……あきのストーカーだったのか」

なんだい、そのあからさまに不審者を見る目は。駄目だぞ。

「ボクがあきおちゃんを物影から見守るようになって一ヶ月が経った頃、リズちゃんが死んじゃったんだ」

多分喧嘩が原因だったんじゃないかと思う。体中傷だらけだったし、ボクがいつともみたくに旧校舎に潜り込んだ時にはすでに事切れいて、ぴくりとも動かなかった。

じわっ、と来そうになった頃、あきおちゃんがやって来た。

ボクは涙と一緒に引っ込んだ。

リズの死体を見つけたらしきあきおちゃんはゆっくりとそばにしゃがみ込んだ。

そしてリズの頭を優しく撫でた。手に血がつくのも構わず。すぐ悲しげな顔だった。

しばらくリズの頭を撫でていたあきおちゃんはふいに立ち上がり、そばに置いていた鞆を拾い上げた。

ごそそと中身を探る。

現れたのは新聞紙。

それを丁寧に床の上に広げる。

そして水を掬うようにそうっとリズを持ち上げ、新聞紙の上に乗せた。

「ああ、埋めに行くのかなあ。って思ったけど、違ったんだ」

あきおちゃんは再び鞆を手にすると、また中身を探った。

目的の物を見つけたのか、ごそそと忙しなく動かしていた手の動きを止めた。

そしておもむろに、あきおちゃんは“それ”を取り出した。

「何だと思う？」

西谷はしばらく思索したあと、さあ？と答えた。

だから早く教えると、目で訴えてくる。

言っちゃっていいのかな。多分びっくりするよ？

でもここでお預けはないよね、可哀相でしょ？

だから教えてあげよう、

「カッターと、空き瓶」

あきおちゃんの秘密を。

「収集家の仕事道具だよ」

可愛いリズちゃん。

ボクのお気に入りのその子は、ボクの目の前で腹を裂かれた。

可愛いリズちゃん。

小さな心臓は、空き瓶の中に入れられて。

可愛いリズちゃん。

君の心臓を奪ったあきおちゃんに、ボクは心奪われたんだ。

「あきおちゃんはボクのハート泥棒だったのさ！」

「……篠枝、お前恥ずかしくないか」

西谷がまたしてもボクを不審者を見る目で見ている。

「ぜんぜん」

「上手い事言つたみたいなの顔してるけど恥ずかしいだけだぞ」

はぁーっ、と盛大にため息をつく西谷。

疲れてるなー。

ちなみにボクは腕がちょー痛いよ。

「……で、どこまで本当なんだ」

「へー？なにが」

「お前の話！ちょっと素直には信じたくない内容だろ」

信じ“られ”ないじゃなくてね。

「失礼だな、全部ほんとの話だって」

「……マジでか」

「信じられない？」

信じたくない？

「あきは……俺の知ってるあきは、んな事しない」

「西谷の知ってるあきおちゃんは、でしょー？」

言葉に詰まる西谷。

ちよつと言い過ぎた？
でも仕方ないよね。

「本当のことなんだから」

さーて。

「うあー。もう限界」

腕の力を抜いて、全体重を真下の西谷にかける。

ぎゃー！と叫ぶ声も気にせず、西谷の胸に顔を埋める。

トクン、トクン。西谷の鼓動が聴こえる。

それが何だか心地好くて。

ボクはそのまま眠りについた。

第10話 父親達よ

俺の神経って思いのほか凶太かったらしい。
篠枝が上に乗ったまま眠れたんだから。

寝返りをうつたかなにかで転がり落ちたらしく、俺が目覚ましたら篠枝は真横に移動していた。

距離感が限りなくゼロなかたちで。

隣ですやすやと眠る篠枝は、どういっわけか俺に抱き着いていた。
しかも、

「直幸……なにやってるの」

「……プ、プロレスごっこ……？」

あきにその現場を目撃された。

「ぶっすー」

不機嫌だ。

あからさまに不機嫌だ。

声に出しちゃうくらい不機嫌だ。

「やっぱりあきおちゃんって怒った顔もカワイ」

「うつさい黙れや」

だからキャラは一定に保てと言ってるんだろ。
怖いから言わないけど。

いかにもふて腐れてますオーラを惜し気もなく放出するあきは、頬杖をついた姿勢のまま空いた方の手でパンにジャムを塗りたくっていた。

わーイチゴジャムかー、かわいいですねー。
やっぱり怖くて言えない。

「わーあきおちゃんイチゴなの？かわいいー」

ああお前はあああ！

「うるさいよ万年発 期」

「えーダメえ？」

そこは否定しろよ。

「あき……何か誤解してるみたいだけど、俺と篠枝はぼーいずなんなら的な事になんかなってないぞ」

「えーあきおちゃん、そんな事考えてたの！？いやらっ」

もうお前は黙ってるよ。

まともに話もできやしない。

「実際にする方がいやらしいよ」

ふんっ、とあきはそっぽを向く。
それを見ていた篠枝はちよっと考えるそぶりをみせたあと、あつ！
と声をあげた。
今度は何だ。

「もしかしてヤキモチ？」

「……………誰が、だつて？」

「えー？だからあきおちゃんが」

「お前はもう喋んな！」

ほら見る、あきが黒いオーラ出しまくってんじゃねーか！
何とか機嫌を取らねば……………。

「ただいまー！」

ぱんっ！と勢いよく開け放ったドアの向こうから現れたのは親父だ
った。

こんなタイミングでややこしいのが帰ってきた……………。

「あつ、おじさんお帰りなさい！」

親父の姿を見た途端、ぱあつと明るい顔になるあき。
態度違いすぎやしないか。

「ただいま秋桜くん。おや、そっちの君は？」

「篠枝佐依っていいいます。二人と同じクラスでお友達なんです。昨日は無理を言って泊めてもらって……。すみません勝手に」

……何だその控えめな態度は。

ていうか俺はいつお前のお友達の仲間入りを果たしたんだ。

「そうか二人の！なら遠慮なんかいらないよ、いつでも泊まりにおいで」

「そんな、悪いです。週に一回泊まりに来るなんて……」

「全然構わないよ。いつでもいつまでもおいでなさいっ！」

「ありがとうございますおじ様！」

ちよっともしもーし。

みんなー俺のこと忘れるてるよー。

なにこれ打ち合わせしてたのか。

「おーい西谷！これ運ぶの手伝ってくれ」

「悪い悪いー！今行く」

玄関から声。多分友達を玄関で待たせてるんだろう。

親父は息子と声を交わす事なくそっちへ向かう。

疎外感！

涙を堪える俺をよそに、親父とお友達は何かを運んできた。

よっこいしゃー！と気合いの籠った声の割にそーっと荷物を下ろす。

「ふう〜。本当におつもいな〜これ」

「いやいや、これは勝利の重み……。俺達の栄光の証だ！」

「そうだな西谷……俺達はずいぶん勝ち取ったんだ！」

男二人は熱い言葉を交わす。

……そろそろ俺喋っていいかな？

「おい親父、何だよその無駄にでかい箱は」

「おお直幸！いたのか！？」

「いたよさつきから！」

しかも何本気でびっくりしてんだよ。

その予想外の出来事に遭遇したみたいな顔やめろ。

俺ん家だよ！我が家だよマイホームだよ！

「だから、何なんだよそれ」

「よくぞ聞いてくれた息子よ、ぬふふふ……」

肩を震わせて笑う親父を俺は心底不気味だと思った。

「あー……これって一体何なんですかね……？」

俺は仕方なく親父の友達に謎の箱の正体を聞いてみた。

「これはね、俺達が今まで追い求めてきた夢の結晶なのだよゆつき
ゆん」

「はあ……」

誰だよゆつきゆんって。

ちなみにこのお友達とは前に一度だけ会った事がある。

ところでこの人ってなんて名前だっけ。

うちってこんな感じで親父の友達がよく来るから、正直顔も名前も
思い出せない人がほとんどだったり。

「これ開けていいの？」

目を輝かせて箱を開ける篠枝。

口と手が一緒に動いている。

“ いいの？” と言い終わる前に箱の蓋は床の上に追いやられた。

「見たいか？ 仕方ない、特別だぞ」

「うわゝなにコレ!？」

その篠枝の言葉に待つてましたと言わんばかりに親父の友達はこう
宣った。

「どうだ佐依、すごかろう。何を隠そう、それはあの、あの！人魚
のミイラなのだ！」

「すっごーい!！」

「もっともっと褒めて！そして父さんのテンションを上げてくれ！」

……ん？

「ほらほらコスモスちゃんも」

「僕も見えていいんですか？」

「佐依のお友達なんだから当然オツケーだよコスモスちゃん」

「あきおちゃんヤバイよ！すっごい、下半分魚だ！」

「上半身は完璧に人間っぽい………これが人魚。やりましたねおじさん！」

箱を囲んでわいわいと盛り上がる一同を見つめながら、俺はこっそり泣いた。

もう、ツッコミきれねえよ………。

親父の友達は篠枝の父親だった。

あきは中学の時から面識があったそうだ。

コスモスは篠枝のお父さんが付けたあきのあだ名。

人魚のミイラとやらはツチノコ探しの道すがら、現地のおじいさんから譲り受けたものらしい。

口には出さないが、絶対に偽物だと俺は思っている。

「じゃあね、あきおちゃん」

「もう来なくていいよ佐依」

「また来週」

お騒がせまくった篠枝親子はこうして帰って行った。
また来るのかよと思った瞬間、体も気も重くなった。

やっと静かになったはずの俺の部屋に、また大きな荷物が増えた。
そして俺は、夜中にその中身が箱から這い出してくる夢を見てうな
されることになるのだった。

第11話 火のないところに煙は立たないっていうけどね

「とうとう血迷っちまったたか、西谷」

月曜日。

教室に入った俺を待ち構えていたAの第一声がそれ。

「なんだよA、藪から棒に」

「うっわそれ俺の口から言わせる気か？」

大袈裟に身を反らせるA、もとい琴原。

何かムカつく。

「俺はちゃんとアドバイスしただろ、三國と話しろって。それを無視してお前という奴は……」

情けねえなあ……とため息をつく。

さっぱり意味がわからない上に余計むかつく。
と、そこへ。

「おっはよダーリン（はあと）」

まためんどくさい奴が声をかけてきやがったよ……。
ふざけた挨拶の主はやはりと言うべきか、外れて欲しい予想の通り

篠枝だった。

「誰がダーリンか。てか語尾にハート付けるなよキモい」

「つつめたいなあ、昨日あんなに愛し合った仲なのにゆっきゅんたらー」

ざわっ…！

あからさまに教室中がざわめく。

「何言ってるの！？ていうかお前らこっち見んなー！」

あっという間にみんなの注目的。

女子が異常に盛り上がってる。怖い。

「ナオユキ……」

そしてそれ以上に怖い、恐怖の大王のお声が背後から。

「あああ秋桜クンどおしたんだねそんなこわい顔しちゃったりなんかしてえ〜」

ぎぎぎ、と音がしそうなほどぎこちなく、まるでロボットみたいな動きにで振り返る。

それにしても最近のロボットはすごいね。

動き滑らかだしやたら動きが複雑化してるし。

……下手な現実逃避も空しく、振り返った先には絵にも描けない（そりゃそうだ、そんな画力ねえし）ほど恐ろしい奴が。

怖いよおかーさん！

「西谷……お前まだ言い逃れするつもりか？諦める、そして洗いざらい言っちまえ」

「すみません俺がやりましたあああつてナゼツ！？」

琴原がそんな事を言うものだから、ついノリで犯人発言してしまっ
た。

その場のノリなんてろくなもんじゃない。

なぜならノリで買った物なんか家に帰ってきた頃には俺なんでも
の買ったんだ……？って微妙に後悔するに決まってるんだよ。
って話が逸れたわ！

「ちょっと待て、誤解だ！篠枝が何かくでもないこと言い触らし
てるっぽい俺は無実だ。むしろ俺被害者だし襲われかけたし！」

俺のこの発言により女子のテンションさらに上昇。

「えっつそお西谷君が受け！？」

「私絶対西谷君攻めかと思ってたのに！」

「あたしは西谷君受け全然いけるよ」

「篠西つて……やっぱ萌えるー！」

女子があらぬ妄想に花を咲かせてしまった。

これはいかん。

何とか弁解しなければと思っていた矢先、絶妙なタイミングでチャ
イムが鳴り、直ぐさま先生が教室に入って来てしまった。

そして誤解が解けぬうちに、あっという間に放課後。朝におつそろしい声で名前を呼ばれてから、俺とあきは今の今まで一切会話していない。

あきは俺の存在を視界から完全に消去しているのか、目も合わせてくれない。

俺はもちろん怖いから話し掛けたりなんかはしてない。

あきは黙々と帰り支度をしている。

そして俺はいつでも帰宅準備万端。

要するに一緒に帰ろうぜ、と言いたい。

そしてこのぎくしゃくした空気をどうにかしたい。

でないと家でもこのままって事になる。

そんなの耐えられねえ、絶対。

「えーっと、あき、そろそろ帰るか？なーんて……」

「直幸」

「な、何だ」

心の中ではひゃひいつ！なんて情けない悲鳴を上げてしまった。

「じゃ、バイバイ」

「へ…？いや、はい？」

「だから帰るんだろ、さっさと行けよ。僕は一人で帰る」

「そんな寂しい事言つなよ、一緒に帰ろうぜ！」

……なんて言えたらよかったのに。

チキンな俺にそんな勇氣ありません。

「あゝあフラれちゃった。そんなかわいそうなゆつきゅんはボクと一緒に帰ろーねー？」

「ぎゃああああつ！何をするー！ー！」

目にも留まらぬ早業で俺を抱き上げ（所謂お姫様抱っこ）、教室から颯爽と立ち去る篠枝。

「止めんかい！お前これシヤレになんないくらい誤解されるって！うちのクラスどころか学校中に噂されるよ！？もはや都市伝説にもなるから！」

「目指せ七不思議だよゆつきゅん！あつははは〜」

「ああああもつお終いだああー！ーっ！ー！」

第12話 篠枝くんのオモチャ

「よいしょっ…と！」

校門前でやっとな解放された。

無駄に元気な掛け声とともに俺は地面に降ろされた。

何か大切なものがごっそりと抜け落ちたというか、根こそぎ奪われたような心地だ。

「あゝ楽しかった」

「お前どこにそんな力隠し持ってたんだよ……」

何か男としてのプライドはずたなんすけど。

俺そんな軽いかそんな貧弱か？

これが話題の細マッチョなのか。

脱いだら凄い人か。

「俺をどこまでおとしめたら気がすむんだのあー！」

胸倉を掴み半泣きで訴えるも全く効果はなかった。

この楽しそうな顔がムカつく。

「しっかしあれだね。あきおちゃんはほんと、ゆっきゅんが好きなんだね」

「何だよ急に……」

「やっぱわかってないんだ」

にやにやにやにやと。

なーんて楽しそうなんだこいつは。

くるりと踵を返し、ゆっくりと歩き出す篠枝。

俺も渋々後に続く。

「あきおちゃんは西谷のこと、本気で好きだよ。ベダ惚れ」

「なわけないだろ……」

「ニブいなゆつきゅん、キミはなあんてウマでシカなんだ。かわいい
そうなあきおちゃん」

つまり馬鹿ってことが。

「あんまりぐだぐだしてるとボクが奪っちゃっぞ」

奪うも何も……。

「別にあきは俺のものってわけじゃねえし……」

ましてや物でもない。

故に俺の意思でどうにかなるもんじゃない。

「だからいつまで経っても西谷はダメなんだよ。わかんないかなあ」

ふう。

わざとらしくため息をつく篠枝。
無駄にイライラする仕種だ。

「ボクと西谷がいちゃついているの見てあきおちゃんはあからさまに怒ってたじゃん？それって誰の目から見てもヤキモチ妬いてるよーにしか見えないよ」

「……ヤキモチ？」

やきもち。

焼き、餅。

じゃなくて、嫉妬、的なの？

「でなきやあんな怒ったりしないでしょ？」

そつえば。

あきが何に対して怒ってるのか、俺は全くわかってなかった。

「てつきり不純な同性の交遊に腹を立ててるものかと……」

「それもそーだけど。まったくダメダメだなあ」

いちいちムカつくやつだ。

それにしても篠枝はどうしてわざわざそんな事を俺に話すんだ？
確かこいつはあきの事好きなんじゃなかったっけ。

そんな俺の思考を知ってか知らずが、にんまりと嫌な笑みを浮かべる篠枝。

「しっかりしてくれよっきゅーん。そのうちあきおちゃん、マジ

でキレちゃうかもよ？」

「それは勘弁……」

ただでさえ今の段階ですでにヘタレ全開の俺はどう対処すればいいんだ。

「でもさあ、どんなにキレたり西谷のことボロボロにしても、結局好きなままなんだろうなあ」

「何さりげなくバイオレンスな事言ってるんだ」

「西谷がどんなにボロボロになろうと、この際どうでもいいよ」

どうでもよかねーよ。

「あきおちゃんにつらい思いさせるのは……やめてね？」

その微妙な間は何だ。

その笑顔が怖い。

「あ、待てよ……傷心のあきおちゃんを優しく慰めてしまえばこっちのもん？」

「腹黒いなお前」

「だって好きなんだもん」

くすくすと笑いながら歩みを進める篠枝の隣で、俺は今日何度目になるのかわからないため息をついた。

「俺もお前みたいに人生をお気楽にエンジョイしてーよ……」

「ひつど。ボクのこと能天気バカだって言いたいのか？」

「大方そんな感じだろ」

「失礼な、ボクだって悩み盛りな思春期なのに！」

むき〜！と怒れる篠枝。

それはどうでもいいとして、今にも飛びかかりそうな勢いで上げられた両手は何だ。

つい反射的に身体が篠枝から逃げる姿勢を取ってしまった。

そんな俺のわずかな反応にさえ目敏く気がつき、篠枝はにやりと楽しげに笑う。

「やだゆっきゅん、そんなに怯えなくてもなあ〜んもしないよ。襲われ待ちなら期待に答えるけど？」

……前々から思ってたが、こいつはガチか。

いや、あきのこと好きだって言ってる時点でそうだよな。

しかも無関係な俺にまで絡んでくるんだから多分ホンモノと見て間違いないだろう。

「今失礼なこと考えてたねゆっきゅん」

あきといい篠枝といい、どうしてこうも俺の頭ン中は二人に筒抜けなんだ。

エスパーかお前ら。

それとも俺は周りに考えてること悟られちゃう人間なのだろうか。

「だいぶ横道逸れたけど、ボクが言いたいこと、わかってくれた？」

「お前はガチ」

「正解だけど、それはまた別の話ってことで」

肯定しやがった。

やはりこいつただ者じゃねえ。

「ふむうー…ゆっきゅんの相手は疲れるぜ」

「お前を相手にしてる俺の方がぜってー疲れとるわ！」

「まあそうだろうね……ボクと付き合うことになる足腰立たなくなるからね」

なぜそつちに話が逸れたんだ。

にやりと嫌らしく浮かべた薄い笑みがこれまた不気味だ。

「とーちゃ〜くー！」

うわぁ〜あんまりおそばに近寄りたくないテンションだ……。

何だかんだで篠枝の家まで誘導されてしまった。

しかし篠枝との下校とはこんなに（身体的にも精神的にも）疲れるものだったのか。

歩きで30分の距離。

俺は断じてヒヨクではないと言い張りたいが、残念ながら身も心も疲弊しきっているのが現実。

「なあ篠枝……歩きで30分かかるならチャリ通いした方がいいんじゃないか」

「え、何言ってるんだよゆっきゅん。ボク普段チャリだよ？」

「へ？」

「今日はさ、ほら、ゆっきゅんとゆっくりお話したくて、なんてひゅきはっ」

今こいつ殴ったら俺、スッキリすると思う。

「まー怒らないでよゆっきゅん、焦らない焦らない」

とても一休みする気になれないのはなぜだろう。

「ついでにウチ寄ってかない？」

「丁寧に、ていちょうにお断りする」

大事なことなので2回言った。

だかやはり篠枝はええ、！と不満げ。

「いいじゃんちょっとくらい減るもんじゃないし」

「減るよお前と一緒にだ」と

誰かの言葉を借りるなら青春ポイントがマイナスになる、そんなところだ。

さっきと帰るっ。

俺は踵を返して一歩踏み出した。

「ゆっきゅん」

「だぁーから丁重に断るって言ってるん」

だろーが。

って、言うつもりだった。

何だこれ。

バチイツ！と全身に痺れが走って。

ありえねえ。

この流れでそれアリか？

あっという間に目の前が真っ暗になった。

第12話 篠枝くんのオモチャ（後書き）

大変お待たせいたしました。やっとこさ続きが書けました。まさかの急展開……どうなることやらです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1289h/>

テディベアの心臓

2011年7月3日23時30分発行